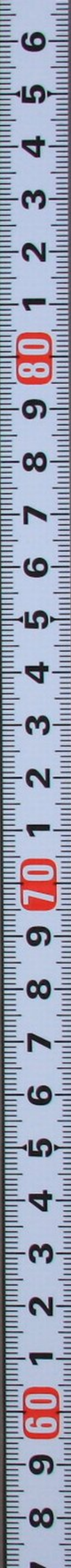


源氏雲隱六帖鈔

雲かたれ  
集

前

前





此雲隱 合并 六帖の物語は古来乃傳ゆる只  
 名のこつりて巻はなりとつりおまは因教空門の  
 道理もあは説みの紫衣部より秘しと世に  
 おこりて次第乃寶苑よを納しとつりて海に  
 源氏の君教心修行菩提涅槃の口門を  
 成就しゆの心とつり此雲隱の巻にははら  
 何しとつりて物をとりて何事ハ極すはら  
 ありてその極をけしとつりてはらとつりて  
 せらありとつり秘しとつりて又或説ゆ  
 山らしき海より通る事ハ或説ゆ筆ははら

後人の編つてをさるるものせつらつららの書に別作  
かり事序より由雲隱の事ハ一宮一か  
式なり事ふ何と云ふことあり又或  
況ハ宇治十帖と或なり此ハ何と云ふ  
ハ源氏物語を天台の六十巻小表よりと云  
みハ雲隱宇治十帖合さくその教をいひ  
智なり又源氏物語乃理しと云ふ  
より雲隱の書ハ世ハ好むものこそお世ハな  
と秘苑とすうと云ふことあり又或  
ハ何と云ふことあり或ハ何と云ふことあり  
後人の説なりと

その理りありあり源氏物語なるはる一  
漢書を編してと云ふことあり或ハ  
家が法なりはる一例乃何り佛經とす  
説ハ事ハ何と云ふことあり或ハ何と云  
みハ何と云ふことあり源氏乃君ハ孫の  
者ハ右政天皇の書号と云ふことあり  
美ハ何と云ふことあり或ハ何と云ふ  
終ハ何と云ふことあり或ハ何と云ふ  
ありと云ふことあり或ハ何と云ふ  
況ハ何と云ふことあり或ハ何と云ふ

いふは本少葉守格人法の師一雲雀子八指  
とつり葉するに花兒と梅人とあましくひたり  
子と遊戯をとおぬく葉やと八指たりし  
ふそそれあつらひつくとほの師とあは  
きよもせよと本が端なまゝにひらき  
師傳とつらうあまのほの人とつらうあは人  
とあり

雲かき

此書ハ身をもつて名を原源氏也はの書ハ葉子  
ふくたれめひたりしを念あつて世にそむいて  
書つたれめひたりしは書よふに日をも始て  
葉のよは十三の葉よあつる年源氏の書たぐ  
お伝となり 孫あまもく志るなり  
あつて七月の日はあつらあきん

正月元日源氏の書乃なまゝに式禮を  
しつた年より一海とつらうあまの書  
しつた日源氏の書とあまの

昼夜を百刻よりしてはゆる寅の母（刻）  
子むらり母（刻）なほみ子（刻）は義

将光り子よ惟秀　おまのいでいし母のまよ（刻）  
母し殿と申るされたり夕暮の大臣を大学の  
君とまよ（刻）一時よ母のうよの五節乃君のしと  
初く文はうりせしつひといとも梅えり  
おに兵衛尉めしとまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）  
とつりしく母しよかきと今と源氏の君り  
ちうはく（刻）なる（刻）とん（刻）り

源氏物語

源氏物語の書名も誰もか

源氏物語の中よ陸身六人ありて名のんしと  
その内よ今おまよとよ源氏の君はまよ（刻）  
のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）  
おまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）  
のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）  
らまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）  
ひしあま（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）

あま（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）  
とまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）

源氏物語のまよ（刻）のまよ（刻）のまよ（刻）

おはようございます

絶えずお祈りして下さる方々に感謝いたします

おはようございますと御返事申し上げます

おはようございます。おはようございます。 惟秀君が来た

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます

おはようございます

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

おはようございます

便か

山のみにて 明石の尾公能祖又申勢の交  
乃能知一のく桂乃山里ハ明石のく傳説り  
そ能さうくに能乃由堂まきしふをとの  
こりし、す又或説は西山よりと 信  
又とよいり 山のみに能こゆる能まかじ  
つとれし

佛の因位り

行 新とより水とるそは花經を求りくとり  
は心經をわりる事新あり菜摘の汲つて

うみあを野へまふのよる浦乃とそ

りりそよいりせりあめあめ虎あそゆし  
ふハ魚の名善見律曰鰯魚長二丈餘有  
四足似龜齒至利禽鹿入水初齒腰即断  
廣列有之 韓退之潮列の刺史とたりし  
祭鰯魚文とけくまき其申曰鰯魚掬處  
食民畜熊豕鹿麋以肥其身種其子孫  
ほをもしめせのり

悉達太子出家し 檀特山よりありし  
拘隣阿鞞摩訶男十力迦葉拘梨太子

五人の侍従をつらりて行法の助をとくし  
後よ五比丘とあふ事經おつる也今の心推考が  
洞佛ののれ修りそ我一人とと志すり  
ゆきこの修り此くといふ佛も十二の  
うけ五人は行法のしをといふれ  
るを修り我も志すいふるつらり  
つらり事考りしはつらり

は車といつてせとすをげ 源氏の御仙左  
修りのいふ事修りつらりつらり歩  
おんとい律の法は出家の牛馬を車お

のいふ事

ありの院 朱雀院のいふ事つらりの  
此位と春日宮はゆがりいふの事つらり  
つらり西山の出家はつらりつらり  
山をすす今ありの院は朱雀院の事  
いふ事つらりつらりつらりつらり  
いふ事つらりつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらり



かみよたむこくろをれよるよはこくろをり  
よめ

かみよあられとくろをり終ふ  
かみよは  
たふめこくろをり終ふ  
を清くしあふこめよあをれを  
あを終ふ

すくくしや おが 言くしあふよめ  
かみよあられとくろをり終ふ  
かみよは

淨土のまこ 金剛經偈云一切有為法如夢

幻泡影如露路亦如電應作如是觀

すくくしや おが 言くしあふよめ

源氏の悪う世の事よ終ふとえさせの  
心んついとぬあり別よするわさ  
のうたは理よとよめあふよめ  
安閑無事とてあふよめ  
のうたは 羅大卿の詩よ山静 似太古日  
長如少年

夏のせこあふよめ  
源氏のホぬらひは雲のふろくをのあふよめ

着いなるそあゝのそあゝのそあゝの

きこあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

あゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

守、在海内。

らぎのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

らぎのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

今、のそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

そあゝのそあゝのそあゝのそあゝのそあゝの

平さん事も口ありてはるしと伝種は縁起  
と法華經よんも佛道入るありての縁起  
の事うれど女もあつてといふ人の源氏を  
いふよるうていふ惜の事いふの記あり  
のいふこと

六條院の源氏の経のふくまふは  
の山依とありてと大東家極田所とありて  
ておちりていふ人といはるといふさや  
世のあやれもいふ源氏ハ万民のたぬ  
あやのいふいふいと漢書曰上為皇天

子下為黎民父母書舜典曰舜二十有  
八載堯乃殂落百姓如喪考妣三年四  
海過之哀音

部谷詩曰離  
原上草一歲一枯栄野火燒不盡春風  
吹又生い謝靈運が及中の謝惠連  
が春草地塘生といふを志のうらみ  
のうらみよつらういふて一篇といふ  
謝靈運がうらみ死といふ事と告う  
の詩のうらみいふといふ今乃病

よりて死せるいざのちしに謝霊運々後の  
昔よあまのころいふ事と見えたりしと  
あのみ源氏の君いそれよわつていさわく  
いせ給ふ事いりいころし

夏うそかりいひいん 惟喬親王世氏  
ついで小跡よいりい給ひしを在京業平い  
いしむ月よあみしていさわくい夏うそ  
わりのいひさわきいふよあく君と見んよ  
よみり事古今伊勢物語よあうき今の人  
惟喬親王とせよいむい給ひよあみい

あみい給ひい六在入申おもつりてあつら  
よりしよは源氏のいりいよあつら給ひい  
のいれい

大お申文のいけき 二人さう源氏のい  
あおい夕暮れんあはの事母いあふよ  
いあふのあにあぬし又たよいすは行  
いまよたあはふいあつらあ入申文  
母あ母あの上こいあつらあ母ああ  
あ母のまよ母いあつらああの上あ  
まよああ地いあつらああの上あ

しりあ友の... 源氏... 冷泉院

冷泉院 源氏乃の弟母の先帝の... 相堂乃... 源氏の... 柳の...

と見ゆ... 源氏... 冷泉院... 源氏の... 柳の...



合傾カウケイキヨ奉キヨの一字に

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの  
源氏の書しとすむの

源氏の書しとすむの







一は定よ恒よりそは源氏のちね酒たよ  
流され縮ひしよ夏の昔よ依て明石むさし  
きれ源氏むさしにみ娘よ通ひしちねひめん  
乃中文と巻よねりまは松風の巻よ都く  
のちく桂の山里に恒ありは東由女入るまよ  
六条院よりりてあはれいよまめこれま  
くくわもろわかじりし源氏のちねのふ  
ずりまらま

世つらしきハ 化ケの字つらしきあはし  
かきんこ有ウ為イ法フ法フ幻クのク化ケまらこ

心シこ化ケのまら下らま今まあはし

心シらに外ウくははあし

流リ水ミのもの 論語イニシテ日子ノ在ニ川ノ上ニ日ノ逝ル者ユクモノ

如クニ斯カク夫カチ不ス捨ス晝シ夜ヤ 涅槃經ニ日ノ人ノ命ノ

不レ得ル過ス於テ山ノ水ニ

つらぬれぬるもの世ニき流ルものつらぬ

つらゆのりんまん 法華經ニ日ノ唯ニ為ス一ノ大事ノ

因緣故ニ出ル現ス世ニりし法ノ法ノ實ノ相ノの妙ノ理ヲ

つらゆとまのつらゆとつらゆとつらゆと

髪ヲとつら衣ヲとつらふしにまらまらまら



成佛と名づく一神仙傳六仙は悟道  
して仙境より入る單七十二人を記す  
源氏の書は仙傳をわけて法をついて長生不  
死の術をいひしりし理を味  
むし昇玄經曰道言神仙成真自然  
空天白日騰景上造紫震とつて按  
よそ天公花仙の類に樗巖乃中より六道の  
亦は仙人なるを立と長生不死の身なり  
事公中子の十六羅漢とつてあまのきり  
おほし源氏の書の中をうかれと即身成佛の

理と悟りて生ひ強し法をくらふて花を  
あつらひ天仙花仙とつていふことあり般若  
燈論曰聲聞菩薩等亦名仙佛於中最  
上尊故已有一切波羅蜜多功德善根  
彼岸故名木仙とつていふも悟乃人の即  
身成佛とつて天天仙花仙といふは科か  
かゝるといふことあり  
あまのきりいふにわが書に記すことあり  
かゝるいふことあり  
おのや肉と割らるる是子ゆかたのしに

ついで穀尊入因位の時維子より野火の  
りえよりしと翅よりとひして火の波つ  
子とよりしよりし大智度論より見ゆね  
や格入肉と割て子よりしよりし平阿含經  
あり

伊くま介しと袖ののりし中火をり維子のこたえ  
まをり維子のこたえ維子のこたえ  
おのち維子のこたえ維子のこたえ  
地

たむかひのりし中火のちのりし中火のち

ついで穀尊入因位の時維子より野火の  
りえよりしと翅よりとひして火の波つ  
子とよりしよりし大智度論より見ゆね  
や格入肉と割て子よりしよりし平阿含經  
あり

の

云々ウツクと云ふ

漢書キウアニカ汲黯傳シキヤウニカウ曰吾欲シキヤウニカウ云々

注師スイコカ古曰猶言ユウゴン如此コトシカ也ト文選モンセン李陵答

蘇武書ソフシ曰云々ク注呂向リウキウ曰云々多言タカクモウ負也ナシ

二

冷泉院レイセンインの

今又イマモト云々

云々

云々

云々

注ハと云々

云々

惟タカ秀ヒデはハ良ニ跟ニ跡ニ云々

云々

おのゝこ

雲のつれの半はまきこ  
り今よりの國ゆつり  
暁方ねのわらわ

六泉院いしゆりかへ

古今物語  
是鬼のこころよあれい  
白ふのこころよあはれ  
あはれ

女の文 母はねはのちぬ  
ちの娘は淑般女

はこすはははく  
のちの文よのち  
のちの文よのち

いふはのちのちのち  
のちのちのちのち









り方  
果にのりて...  
の布にまじりて...  
夕雲と名をよみし時よの春をまじりて...  
汗押めひつりしきまじりて...  
法師...  
つらき僧法師...  
禱る事と感...  
欣喜のつらき...  
経...  
い...  
冷泉院のつらき

つらき...  
冷泉院  
天子の御位...  
あつ...  
か...  
ま...  
冷泉院  
本朝の皇極天皇醍醐天皇...  
す...  
す...

きつとつづつめつさつしつたつて地つくはあり  
あつてつづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり

つづつめつさつしつたつて地つくはあり













子と昌とをりしりつたむし周の文王より昌入  
子と登しりりつたむし武王よりけ時と殷の世  
七いり周入せしむれりされん文おらむし  
弟この子にゆりふんおぬしされん兄二人ハ  
讓て居しりりつたむし

七いりつたむし 本朝文徳天皇より御子

二人南よりつた文ハ惟喬親王とて紀名虎  
の娘静子の産むりし取し弟二の文ハ惟仁  
親王とて忠仁公より娘明子よりみり取  
り見たり惟喬のみこハ引違られり二の文

弟位よりつたむし

七いりつたむし

惟喬のみこハ更な後ハ惟仁のみこハ后後れ  
り弟が二つた文ハ位よりみり取り見たり  
弟の位よりつたむし今ハ弟ハ  
二人が二つた後入見たり見たり見たり見たり  
七いりつたむし例は二つたむし  
三の文ハ三つたむし  
白雲むし三つたむし  
おかりつたむし

蕉内方はよかりしなり  
竹内の子に中納言  
やうり本は権大納言とて  
右方おと兼一は  
あつて内方はよかりしなり

友成乃以時より 光源氏いらずやそのおと  
牛車は宣えんとてちりし女のおとにち成方お  
りり友乃しと兼よ右上天皇入りさる号は  
し弟はひと兼成とて世のなりしなり  
おかしひなりけ友よ右成と兼成の源氏のおと兼成  
兼成乃しとてに由方はよかりしなり  
しと兼よ何つ友成の以時いふは兼成の

又一兼よ今とて兼成とてす白文は源氏のお  
しりてい友成の以時より兼成のなりしなり  
二兼成はひと兼成の源氏のおと兼成の  
り娘母の内方は入女とて兼成の源氏のおと兼成  
日後の妹に通首中君と兼成の源氏のおと兼成  
小なりと兼成の源氏のおと兼成の源氏のおと兼成  
友乃しと兼成の源氏のおと兼成の源氏のおと兼成  
ゆつりれ友友兼成の源氏のおと兼成の源氏のおと兼成  
今と兼成の源氏のおと兼成の源氏のおと兼成  
白文は源氏のおと兼成の源氏のおと兼成の源氏のおと兼成

知りしなるしこられぬ紙地（紙しづ）

九方入太の君 夕や東六の君の母と惟光の娘  
友重の内侍とやしる本の君に白糸のついで  
ゆいしは美香殿の女清しをりしつこ

式部らの姫君 晴（つゆ）吟或部らの文の源氏に君よ  
此泉地もしつゆしつゆきりみ入る事にならぬ  
はつ娘の文の君しつこられぬ父はつらぬ  
しつこられぬ母の申馬路（まじり）つらぬ  
明石の中をみしつこられぬつらぬ  
のつこられぬつらぬつらぬつらぬ

美大のつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ  
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of cursive script. Includes a small marginal note at the top left.

二入文の東入者をととのきしとほし  
あつま  
 今よ入女二の文の母の友を重女はしやま寄本のま  
 月のつらまめく甚方わを母よさるは  
 飛香舎入藤の宴の日つふ入文とたわ  
 ゐのいふつら女二入文とつらあつふ  
 めのふと姉あなえふいらふつらあつふ  
 しと東のまふふ小也入姫まの事今  
 本書か二入文と小野の姫まの事  
 かしよとつられしとつらし



留早文煎

不持封以翠苔如風露叶富

開香知熟因野如閑事煎愈良

園家林茂今秋藤小語問為良

秋藤

殘菊

陶家秋苑冷殘菊  
小籬間爲是  
開時晚應因得地  
閑唯須偷見  
不許任心攀  
若使風霜如當  
留早老顏